

よみがえる遺産「貞山運河」

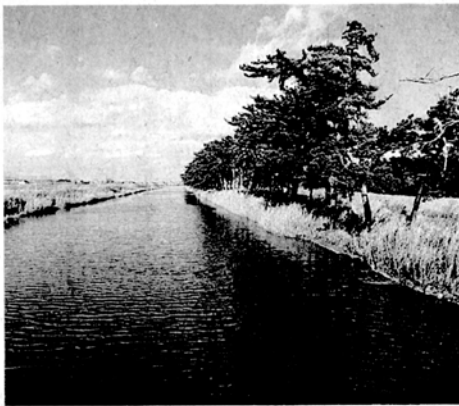
温泉施設など周辺開発進む

太平洋に面した宮城県沿岸部。約400年前、仙台藩祖伊達政宗は城下の建設に際し、広い領内から物資を集めるための水路の開削を行った。それが貞山運河である。

まず奥南地方。築城に使う木材を運ぶため、阿武隈川河口から名取の閑上までを整えた。木曳堀と呼ぶ。名取川、広瀬川をさかのぼり、船着き場に降ろした。今も仙台市若林区舟丁、南材木町の町名が残る。続いて奥北

地方で取れる米の集積地だった塩釜から城下に運び入れる御舟入堀を築いた。2つをつなぐ新堀は明治期に整備された。政宗の法名「貞山禅利大居士」から名を取って全長31・5キロの運河が完成し、交通と農業漁業のな

りわいで活気づいた。2011年3月の東日本大震災によって歴史遺産である運河もダメージを受けたが、運河沿いでは近年新しいまちづくりが始動している。若林区



全長31.5キロ、日本最長クラスの貞山運河。木材をはじめとした物資の運搬を担う物流の大動脈だった

に果物狩りを楽しめる「JRフルーツパーク仙台あらはま」や、温泉と食事の「アクアイグニス仙台」がオープン。名取市では、名取川の河川敷を活用した商業施設「かわまちてらす閑上」が人気を集める。ゆりあけ

港朝市協同組合理事長の櫻井広行氏は「震災で支援してもらった全国の方に恩返しを込めて、にぎわい復活を目指したい」と話す。潮風を浴びてサイクリングロードを走る市民の姿も多く見られ、アウトドア派の注目も集めている。

海外では英国やドイツなどで運河の歴史遺産の価値をうまく活用し、地域振興を図る成功例が見

られる。東北観光推進機構専務理事の紺野純一氏は「物流や生活の動脈だった貞山運河には歴史的な価値がある。行政のバックアップも得られ、観光資源として期待できる。点から線、面に広げて復興を後押ししたい」と語る。



櫻井会長

4月には一般社団法人・貞山運河ネット(櫻井広行会長)が設立され、地元企業など40法人が結集し、周遊船の運航やマップ作製でブランド化を図るなど、にぎわいづくりに本格化してきた。